

CSR思想の中国における展開に関する一考察

李 昱

グローバル化の進展により、中国経済は急速に発展を遂げたが、それと同時に深刻化しつつある環境問題や社会問題も看過してはならない。確かに、安価な労働力や豊富な資源を背景に、中国は多国籍企業の生産拠点としてグローバル市場の中で台頭してきたが、反面、不当労働や公害問題等のスキャンダルを引き起こし、社会から厳しく指弾されるようになってきた。また、これらの企業不祥事の頻発は、企業に対する法的規制の強化を招いてきた。このように、中国企業は、社会的・法的・政治的圧力を受け、「CSR：Corporate Social Responsibility（企業の社会的責任）」に対する関心を高めていったのである。

中でも、2005年の会社法改正（施行は翌年）は、新たにCSRに関する条文が取り込まれたこともあり、この趨勢に拍車をかけることになった。その後、CSRとも通底する政府からの指針や国策も相次ぎ打ち出されるようになった。例えば、2015年に発表された『第13次五カ年計画』に盛り込まれた「イノベーション、協調、グリーン（エコ）、開放、共有」からなる5つの発展理念や、最近の中国共産党第19回全国代表大会で提示された「きれいな中国を建設する」という国家建設の新たな目標は、環境保護やグリーン・エコノミーの強化を謳っているという点で、CSRと無縁とは言えない。さらに、近年注目されている「一帯一路」政策に見られるように、中国経済のグローバル化が一段と推し進められると、当然高度な社会的意識を持った外国企業との取引も増してこよう。こうして見ると、中国において、CSR思想の重要性は今後ますます高まってくることが見込まれる。

こうした情勢を踏まえて、本論文では、CSR思想が改革開放政策の実施以降、社会構造転換を遂げる過程でどのように展開されてきたかを解明したうえで、中国におけるCSRの取組みの実状を把握し、今後の展開に向けての課題を考察することにした。その際、主として文献サーベイを中心に、統計資料に基づく実証分析などの方法を用いながら進めることにした。

以下は、本論文の構成である。

まず第1章では、CSR思想の基本的な考え方を把握するために、代表的な先行研究を概観することにした。具体的には、フレデリックの所論に依拠しながら、その思想の発展を3期で捉え、その要点を整理することにした。

第2章では、中国におけるCSRの進展を、CSRを取り巻く政治的・法的環境の変化、それに対する企業の対応ならびに取組み、それを促進する関連諸機関の動向、およびそれに関する学術研究の4つの面から多角的に分析整理した。ここでは、中国におけるCSRの進展を次の3段階で捉えることにした。まず第1段階（CSR思想の生成期）では、中国政府による経済改革を通し、CSRを履行する環境整備が徐々になされてきた。次の第2段階（CSRの基本理念をめぐる論争期）では、海外取引企業の要請や政府の公的規制に応えるべく、中国企業が次第にCSRを重要視し始めた。そして第3段階（CSR思想の普及期）では、経済発展に伴う負の随伴的結果の顕在化により、CSRへの関心が俄かに社会的な広がりを見せる中、中国企業はCSR活動を一層求められるようになってきた。

第3章では、中国のCSRの実状や課題について統計資料や実例を用いて検討した。まず、データ分析のフレームワークを提示したうえでCSRへの取組みの実状を、企業形態別で概観した。その結果は決して楽観的だとは言えない。調査対象とした大手企業トップ300社に限定しても、全体としてはCSRへの取

組みは「初心者」の段階に止まっている。そこで、その実情をより詳細に捉えるために、中国国内で最も積極的にCSRの実践に取り込んでいる国有企業の中国南方電網と民営企業のファーウェイを取り上げ、同業種の日本企業と比較検討することで、その特徴と問題点を明るみにした。その結果、中国におけるCSRの推進は、総じて未だに「任重くして道遠し」といったことがリアルに理解することができた。

最後に、中国におけるCSRの今後の課題について若干付言して、本論文を閉じることにした。